

# 歴史を記録すること、あるいは隠蔽への抵抗 ～シンポジウム記録～

(整理・文責) 土屋 昌明 + 前田 年昭

発言：下澤和義・土屋昌明・矢吹晋（報告順）

司会：前田年昭

**司会（前田）** 司会担当の前田です。私の自己紹介は、小さなパンフレット<sup>1</sup>をお配りしたので省略します。言いつ放しのなれ合い的サロンではない論議、一人ひとりが考えるきっかけになるような討議にしたいと思います。よろしくお願いします。矢吹さんが「文化大革命がなかったら、私は中国研究者にならなかった」とおっしゃいましたが、私もまた「文化大革命がなかったら、高校を中退して在野でアジアの文字と組版を考えるという道には進まなかった」と思います。

討論をかみ合わせていくために、時間の関係で先ほどはしよっていただいた発表の補足説明をお願いしたいと思います。土屋さんには、ペーパーで触れられていましたが話でほとんど省略されていたアントニオーニのドキュメンタリー『中国』についてお話をいただきます。次に矢吹さんから、これもペーパーで詳細に論証されていたのですが、現在の中国をどう見るのか、現在の中国をしきっているのはいったい誰なのか、ということについて補足をお願いします。

**土屋** それではアントニオーニの映像を見ていただいた方がいいと思います。この映画は日本ではぜんぜん公開されたことがないのですが、『北京 1966』との関係で問題となるところだけちょっと見ていただきます。下澤先生が問題とされた「まなざし」についてで、これが重要な点です。ここを見て下さい。これは、アントニオーニが中国に関するドキュメンタリーを撮りに 1972 年に河南省の農村に行って、そこの農村の人たちにカメラを向けるんです。その映像は、今では絶対に見られない中国の人々の「まなざし」なのです。

(上映部分字幕)<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 前田年昭「歴史をつくるのは誰か 下放、すなわちスタイルの根底的転換＝文体革命を！」鵜飼哲他編『津波の後の第一講』岩波書店、2012 年、所収。

<sup>2</sup> Michelangelo Antonioni, *China Chungkuo*. (1973 年)。フランス語字幕からの下澤和義訳、行は適宜おいこんである。ただし当日の字幕は中国語だった。

我々はさらに山奥に行き、前触れもなしに或る村に入る。

廃村で無人のように見える……

真っ先に目を引いたのは、壁の告示だ。その翻訳を聞いて驚いた。

領地に侵入したインドの軍隊への抗議が、完璧な中国語で書かれていたのだ。

ためらいながらも村長は我々を村に入れてくれたが、気がかりなので、先に立って案内をする。

戸口には比喻に富んだ言葉が掲げてある。

例えば「赤い陽の光が千の秋のために輝く」。

「利己主義を打倒し、修正主義を批判しなければならぬ」。

「毛主席の長寿を、謹んでお祈りします」。

ここの中国人たちは西洋人をまったく見たことがない。

彼らは驚き、怯え、もの珍しげに、おずおず外に出てくる。

見たいという気持ちには逆らえない。

我々は彼らを撮り続けるが、ここでは余所者<sup>よそ</sup>は我々だということを痛感する。

カメラの向こう側からすれば、我々は彼らにとって未知の対象であり、おそらくは少々滑稽な存在だろう。われらヨーロッパ人の傲慢さにとってはきつい一撃だ。人類の四分の一にとって、我々は知られておらず、そのせいで怖れられている。

我々の目は丸っこく、髪は巻き毛で、高く骨ばった鼻、青白い肌、軽薄なしぐさ、奇妙なかたち<sup>かたち</sup>に裁った服……

彼らは怯えながらも礼儀を守っている。自分が逃げたら我々の気持ちを害するのではないかと心配し、ときにはこわばって身がすくんだまま、レンズの前にとどまろうとしている。

だから、この村に入りこんでいる間、我々が観察した顔の陳列室にはあまり表情はなかったが、そこには何の敵意もなかった。

ロマンチックに言えば「古き良き中国」みたいな感じですが、ここに撮られた中国の人々のまなざしには、単に外国人が珍しいというだけではなくて、もう少し深い意味があるようなのです。いろいろな解釈が可能ですが、このまなざしが非常に強烈だということは言えます。さきほど二人の方が文革の衝撃を受けたということをおっしゃいました。私自身は、文革のときは子供だったのでわかりませんでしたし、この映画も見たことがなかったのです。私は 1981 年、学生の時に中国旅行に行ったんですが、当時は個人旅行はできませんでしたので、日中友好訪中団という団員として行ったのです。当時は中国の公安の人が旅先についてくる。自由活

動時間というのではないんです。ですから、環境的には、このアントニオーニの撮影と似ています。そのときに私自身が、やはりあの「まなざし」を向けられたんです<sup>1</sup>。そのため、この映像を見たときに、見たことがあるような感じがしました。中国の人たちのあのまなざしはいったい何なのか。なぜ私たちをああいうふうに見るのか。好奇心でもあり、こわいようでもあり、何か非常に複雑な感情を持つまなざしです。それが私にとっては、中国研究の出発点にあったんですね。

これと同じ経験をフランスの批評家であるジュリア・クリステヴァがしていて、『中国の女たち』という本のなかで、そのことについて書いています。彼女にとっては、あのまなざしと自分との間の距離をどのように埋めていったらいいのか、そのための中国研究だったようです。期せずして、アントニオーニが撮ったものと、クリステヴァが会ったものと、そして私が学生時代に会ったものが、同じあの「まなざし」だったことがわかったのです。この点と、いま話題にしている『北京 1966』の写真とは、通じるものがあるのではないかと思います。

**前田** どうもありがとうございました。矢吹さん、お願いします。

**矢吹** では簡単にお答えします。私のレジュメの9ページを御覧いただきたいのですが、上から6行目ですね、毛沢東の言葉です。「現在のソ連は…」、このソ連はというところを中国に置き換えて読んでみますね。「現在の中国はブルジョア独裁、大ブルジョア独裁、ナチスのファシズム独裁、ヒトラー流の独裁である。彼らはゴロツキ集団であり、ドゴールよりもはるかに悪い」。ドゴールがなんで出てくるかというのは中仏国交回復なんです。一方ではアメリカと対抗しながら国交回復したドゴールを非常に歓迎して大使館でいろいろやってるわけですよ。中国と国交正常化を行うドゴールはまともだ、そのドゴールと比べてさえ、「ソ連」は劣る、これを社会主義などと錯覚するな、これが当時の毛沢東の「ソ連」評価です。もう一つの評価として、次の発言もあります。「官僚主義者階級と労働者・貧農・下層中農とは鋭く対立した二つの階級である」、「資本主義の道を歩むこれらの指導者〔走資派とかあるいは実権派とか、当時、日本では訳されていました〕それは労働者階級の血を吸うブルジョア分子にすでに変わってしまったか、あるいは今まさに変わりつつある」。これは1964年5月に語った毛沢東の言

---

<sup>1</sup> 私は1981年3月21日（北京）、22日（大同）の日記にこう書いている。「彼らの顔は無気力と無関心に占領されている。その無関心をめったにみない外国人によってくすぐられたように、ほとんどの人はこちらをのぞき込む。しかめっつらとだらしなくあけた口でもって。」「彼らはただ黙然とつたつていて、嫉妬の感情すら見えないように思われる。嫉妬の感情が心理裏にあるかないかは理解の外にあるとしても、彼らの行為は嫉妬として僕ら旅行者にとられる危険があるのは客観的に明白なのに、彼らはそれに気がつかないか、あるいは旅行者にそうとられることに何の感情も抱かないかしているのは、僕ら日本人には考えられないことだ。彼らは何を考えて、何を感じながら、そこにつたつてっているのか？」

葉です。毛沢東から見れば、この時にもう文革に着手しようとしているんですよ。彼はもうこういうふうには、中国は 49 年革命の成果が官僚たちによって歪曲され、官僚たちは労働者の血を吸ってると言い切っているわけです。ただこの言葉が実際に「半公表」されたのは、それから 3 年後あたり、そして『人民日報』等のメディアが引用したのは 76 年、ほとんど文革が終わる頃ですね。当時は『人民日報』『解放軍報』『紅旗』三紙共同社説に引用されました。これが、毛沢東がなぜ文化大革命をやろうとしたか、の解説です。つまり、「ソ連」と同じように、中国がこういう事になったら困る、これを防ぐのが文革だ、と毛沢東は考えたわけですね。それから何十年か経って、今、中国の腐敗はものすごいと言われていますね。例えば温家宝総理でさえ、当初は「庶民宰相」で「民と親しむ」（親民）をキーワードとしていた。天災、人災を問わず、全国で事故があると即座に出向いて陣頭指揮して、涙を流し、「民に親しまれる宰相」と呼ばれてきたけれども、実は、スキャンダル暴露によると、彼の家族がものすごいカネを貯め込んで、と言われている<sup>1</sup>。それから最近は習近平体制になって、王岐山が規律検査を始めたら、幹部達はさかんに別荘を売り払って現金化しようとしてる。調査されると困るから。そんな話がもう新聞に出てますね<sup>2</sup>。

つまり、前田さんの問いに対してはズバリ「毛沢東の予言どおりだ」というのが私の答えです。ただし、「毛沢東がかつてこう語り、いま腐敗がこう報じられている」というだけじゃ、ぜんぜん説得性がない、社会科学の分析とはいえない。高級幹部たちがどれぐらい貯め込んでいるのか、所得調査をほんとはやりたいですね。だけどそれはできない。だからなかなか歯がゆいですね。

理論的には「官僚資本主義者階級」とか、あるいは「国家資本主義」のキーワードを援用して分析するのがよいと思います。要するに、「国家権力」を利用しながら、蓄財している。これが中国の官僚主義者階級の現実と見ています。ただし、単に蓄財だけをやってるわけじゃなくて、現実には行政をそれなりに遂行しているわけです。そういうのが今の中国政治の実態だと私は考えています。問題は、その実証がなかなか難しいことです。汚職の話をいくら列举しても、それは部分的な個別例に留まるならば、官僚主義者階級とは呼べないかもしれない。

ただ、トップ 7 人の常務委員中の二人（李克強と王岐山）、二人とも 7 人のなかではマトモな方だと私は思うのですが、彼らがフランス革命の前夜を描いたトクヴィルの『旧体制と大革命』を愛読書に挙げて、ほっといたら、ほんとに「中国でフランス革命のような革命が起こ

---

<sup>1</sup> China: To the money born, *The Financial Times*, March 29 2010. Lobbying, a Windfall and a Leader's Family, Chinese Insurer's Regulatory Victory Proved a Boon to Premier's Relatives, *The New York Times*, November 25, 2012.

<sup>2</sup> 「习近平反常、王岐山要有大动作」、2013 年 1 月 2 日、2012 年の最后一日、中共新任总书记习近平主持政治局会议，首次部署 2013 年反腐工作，并确定将于一月召开第十八届中央纪律检查委员会第二次全体会议。

る」と言っているわけですよ。これは穏やかではない。現在の権力腐敗はそれぐらいの状況だ、と権力者自身が認めているのです。

とはいえ私のもう一つの判断ですが、だからといって、「共産党はあと十年はもたないだろう」という意見には与<sup>くみ</sup>しない。私はそうは思わない。共産党という組織というのは非常に優秀な組織で、一方で、腐敗等の問題がたくさんあるからといって、十年くらいで崩れるような政党じゃないと私は見ています。何よりも共産党トップがこういう「危機意識」を持っていることが肝要です。こういう危機意識を備えていれば、対応できる。小さい反乱でも、起こったらすぐに潰す。そうすれば、なんとか体制は保ちますよ。そういうのが今の状況だと、私は認識しています。

**前田** ありがとうございます。討議はまず、今回のシンポジウムを準備してこられた土屋さんの問題提起を切り口に始めていきたいと思います。土屋さんはふたつ、映像の主観性という問題と歴史とは何かという問題について述べられました。映像の主観性とは、映像は、見る者にとってもまた撮る者にとっても主観的なものである、ということですね。

下澤さんの最初のご報告では、プロ対アマという対比がされて、俗耳に入りやすい反面で私は何か違和感を感じざるをえませんでした。というのは、現在の日本では、プロ、つまり政治的でありプロパガンダであるというレッテル自体、否定的な言葉になっていると思うのです。インターネットの時代は素人の時代であり、アマチュアというとそれ自体でいいもの、プロフェッショナルというとそれ自体で汚れたもの、というプロトタイプに陥っていないだろうか。文革に対して相対立する共感派であれ反対派であれ、どちらの側にもそれぞれプロもいるしアマチュアもいる、したがって対立はプロ対アマではないのではないか、というのが私の問いです。下澤さんいかがでしょうか？

**下澤** 非常にいい点を突いてくださったと思います。私はけっしてアマチュアが、特権的な客観性を持っているとか、非常にニュートラルな視点を確保できるような、素晴らしい存在であるというような意味で今回言ったわけではありません。まず、そこをご理解いただきたいと思います。と言いますのは、アマチュアにはアマチュアの偏見があります。フランスの場合で言いますと、基本的に中国に対する無関心とか情報の無さというものがあまして、いわゆるオリエンタリズムとかエキゾチシズムの伝統というものが分厚くあって、やはりこれはアマチュア文化を担っているんですね。ざっくり言うと、フランスの場合は旧インドシナ、いまのベトナムに 54 年、ディエンビエンフーで負けてから、アジアには消極的になってしまった。で、むしろ 54 年以降はアルジェリアですとか、アフリカの旧植民地の方へ宗主国としてコミット

してゆく。で、例えばそれが、今のマリの問題とかアルジェリアの邦人のテロの問題とかにずっとつながっているんですけども、そういうフランスから見ると、やはり、中国というのはまだ、こう言いかたができるとすれば、ファンタジーとか幻想に包まれている部分も残っているんです。

例えば、73年にスキャンダルになった映画が一本あります。タイトルが『パリの中国人』と言いまして、ジャン・ヤヌという監督が撮った、中国人が大挙してパリを占領するという映画です。その時の中国人の隊長役を演じているのが、なぜか日本人の長塚京三という俳優です。彼がソルボンヌに留学していた時期のことですが、そういう日本人のイメージでもって中国人に置き換えてしまうくらい、フランスの一般的な中国人認識は曖昧でいいかげんな部分もありますし、映画はコメディーなんですけど、占領したフランス人が性的に墮落しているの、中国軍は自分たちも墮落したらかなわん、というのでまた来たときとおなじくらい唐突に引き揚げてしまうという、荒唐無稽な筋なんです。ジャン・ヤヌはゴダールの『ウイークエンド』では主演をやっていた人ですが、これは「黄禍」のようなフランス人の中国人像を投影した映画ですから、当時は中国の反感を買いまして、74年の4月なんですけど、中国入りしようとしていたフランス人のビザ申請が400人分却下された、という事態もおきております。ですので、そういう平均的なフランス人の持っているアマチュア感覚、中国に対する一般的な感覚ですね、これは基盤としてブランさんにもいくぶんかはあるわけでして、それは私は否定はいたしません。

ただ、それでもなおかつ今回、なぜこの写真集を取り上げたかといいますと、ブランさん本人は多くを語っていないのですが、移民の出身ということで、お父さんがフランス語圏外の出身だそうです。そのへんのことは、ご本人もこの本の中で書かれておりまして、それによると、ブランさんご一家がフランスに移ってきて、ようやくパリの文化に馴染んできたにもかかわらず、ブランさん自身は、あえてパリを出て異国に行ってみたい、という気持ちはどうしても湧いた、それを抑えられない、それはやっぱり自分が移民の出身からだろう。自分は外に出て行って色んな人と絆を結んでみたい。それがおそらく自分を駆り立てたのではないか、ということを書いています。移民というと、ちょっと日本では強い語感を持つ言葉ですが、ひとつの例として、近年のデータですが、フランス社会で自分のお父さんお母さん、さらにもう一つ上の世代のおじいちゃんおばあちゃん、この、2代上まで遡ったときに、どちらかが外国の出身である、そういういわゆるハーフとかクォーターですね、そういうフランス人が全人口のうちどれくらいいるか、みなさんイメージできますか？ 父親・母親か、祖父母の世代まで遡ったときに、ピュアなフランス人ではない方たちが、全人口の四分の一だそうです。われわれが考えている以上に、一般的にフランス社会というのは人種のるつぼであり、人口の流動が国際的にボー

ダーレスにおきている。そういう移民文化を体現されているブランさんが、ナショナリズムとかフランスべったりの感覚とは別のところで、もっと横断性とか移動性というものをお持ちになっていて、で、どんどんと北京の現場の中に飛び込んで無邪気に写真を撮っていた、ということ、私は非常に強調したいな、と思うんですが、それで答えになるでしょうか？

**前田** ありがとうございます。アマチュアや素人の「常識」にも、その時代と社会が刻まれ、ブランさんの一般性と個別性があるということですね。先へ進めたいと思います。土屋さんのもうひとつの問題提起は歴史の問題でした。この 20 年の転換で、いわゆる歴史物語論、すべては相対化しようという面が強調されたあまり、しっかりとした史料批判が弱くなった面がでてきたのではないかと。矢吹さんの緻密なお仕事はこうした傾向への批判でもあると思います。事実を検証することなく、大衆迎合でいい加減なことを書く『朝日新聞』、天安門で虐殺された、たいへんだ、酷い！ と書いたほうがセンセーショナルですしね。土屋さんが、歴史の方法としてアナル学派のことを少し話されたと思いますが、映像とか社会史、風俗史にまで研究が進んだのはアナル学派の良い面だと思いますが、他方では、通史が書けなくなりました。歴史の哲学について論じられることが少なくなったのじゃないか。

ここで脱線して内輪の話をしますと、今回のシンポジウムの事前の意見交換で土屋さんの「文化大革命 10 年説には疑問がある」との意見に矢吹さんが「その点については同意」と簡潔なコメントを寄せられた一コマがありました。文革とは、いつからいつまでなのか、文革 10 年説批判の内容について、歴史の時代区分論、自分はどこで区切って、何を文革とするのか、その根拠は何なのか、ということをお聞きしたいと思います。まず、土屋さんからお願いします。

**土屋** 歴史の問題を考えると、たとえば今の文革の期間の問題ですね、一番はじめに 66 年から始まったかどうかの問題があるし、76 年で終わったかというのも問題になるわけです。それで、どこまで行ったのかという問題が、意見の違いを理解するのにわかりやすいと思うんです。たとえば 66 年 5 月から始まったとして、68 年で終わったという考え方もあるし、それから 68 年からまだずっと続いて 76 年まで行ったという考えもある。それはその人の立場によって、どこまで、って言ってるわけです。ですから今の前田さんの質問というのは、実は私に向かって、あなたはどのような立場から文革と言っているのかと、そういうふうな質問なのです。で、私が言いたいのは、さっき話したように、政治的な立場でどこまでなのか。たとえば造反派の立場では、68 年<sup>しま</sup>まででもうお終いなんです。そのあとは違う時代になる。私は、自分が政治的運動もしないし、思想も持っていないのですけれども、政治や思想の枠組みではなく、

社会史的に考えたいということなんです。つまり、現在問題なのは、自分がどの立場に立って、そこから文革をどう考えるか、ということではなくて、むしろ問題なのは、それが全部消去されているという点なのです。そこを復元してもう一回考え直すということです。実は、それをする事自体が政治的立場になるのです。

現在中国で在野の人たちが文革のことを考えようとしています。私のレジюмеにある胡傑という映画監督、今日その話ではできなかったけれども、彼なんかは文化大革命に関する記録映画を撮っていて、被害者や加害者、とにかく関係者にインタビューして記録をとっています。記録をとっておかないとなくなってしまう。記録をとっておこうとすること自体が、中国共産党の「歴史決議」に反することなんです。ここには、権力による歴史の創出とそれ以外のものの消去、そして、それに対する在野の人の記録への執念と歴史への異議申し立て、という激しいダイナミズムが存在します。そこが今の私たちにとっては重要なポイントじゃないかな、と思います。

前田 はい。矢吹さん。お願いします。

矢吹 一つは、「10年の文革」と言ってるのは、別な言葉でいうと「毛沢東晩年の治世10年」という時期を指している。文革の内容を論じているのではないですね。別の例を挙げますが、今、習近平が、「改革開放前の路線」と「改革開放後の路線」を切り離し、対立させるな、とさかんに強調しています。言ってみれば毛沢東時代と鄧小平時代は、やっている政策は180度全然違う。これは水と油ほど違うけれども、いずれも共産党がやっていることであり、それぞれの時期にはそれらが必要であった。だから、それをやった。まあ共産党を信じて、ついてきて欲しい、疑ってはならぬ、というお説教ですね。

そういう政治的な立場、広義の政治的な立場から位置づける文革論と、具体的に内容に即して、紅衛兵という造反派が造反した時代。造反派が実権派を打倒せよと、幹部を批判した時代。今度は造反派が逆襲され、下放という形で、黒竜江の北大荒や辺境に送られ、都会育ちの若者が塗炭の苦難を味わう段階。本当に貧しい僻地に追いやられていた時代。そのうちに、今度は部分的に、太子党の息子とか、その縁者がつてを頼り、いつのまにか都会へ戻る。池谷薫監督の映画『延安の娘』は、紅衛兵の男女が私生児を残して北京に戻る話です。

他方、五七幹部学校に送られていた実権派幹部たちも名誉回復して北京に戻る。たとえば田中訪中を迎えるために、日本語の通訳や関係者が呼び戻される例は典型的なケースです。幹部の復権、名誉回復は、ただちにそれらの幹部を打倒する急先鋒の役割を果たしていた林彪派にとっては、奪権した権力をふたたび、奪い返されることを意味する。その逆流を防ぐために



起こったのが林彪事件ですね。文革を担っていた林彪派が毛沢東暗殺までつき進むのが「571工程紀要」です。林彪自身が暗殺計画にどこまでコミットしたかは、よくわかりませんが、息子の林立果が中心にいたことは確実です。このように、文革の進行を段階的に見ていくと、流れが把握できる。私自身は講談社の現代新書『文化大革命』<sup>1</sup>で、私なりにまとめていますから、もしご興味があれば読んでください。

私は今回、土屋さんに誘われてこのシンポジウムに参加して良かったと思っているのは、ご紹介にでたような、北京大学の印紅標さんの本を知ったことです。印教授の本が香港で出たことは知っていたのですが、中国の学者っていうのは、日本も似たようなものですが、御用学者ばかりが、ばからしいことを語る事例が多いので、あきれ返っていたのです。信頼できる学者はどこにいるか、目利きしたうえで信頼できる本だけを読むことにしようと腹を決めていました。で、印紅標教授は真面目な学者であることがよく分かりました。主著『失踪者の足跡』は、香港の本屋からネットで買おうとしたら、トラブルが生じたのでキャンセルしたためにまだ読んでないんですけども、それ以外の主な論文は、ネットで読めるのでほとんど読みました。有名な聶元梓ら7人組の「大字報」は、文革の始まりを告げる重要な壁新聞ですが、印教授は北京大学の地の利を活かして関係者7人を全部1人1人インタビューしたり、記録を残したの<sup>2</sup>については、徹底的に内容を点検している<sup>3</sup>。こうして、一枚の大字報が、毛沢東、康生のような中央レベル、北京市党委員会レベル、北京大学当局、哲学科教研室レベルと、当時の共産党の支配体制のなかで、中間の妨害を排除しつつ生まれた経過を「細密画」のように描いています。一枚の細密画によって、現在の公認解釈（歴史問題決議に代表される）の虚偽、すなわち恣意的な政治的断罪が事実<sup>てっけつ</sup>に合わないことを剔抉しています。

まあ、北京大学の関係者だから出来る取材なんですけども。あるいは文革が社会的矛盾を背景として生まれた点を見逃して、四人組の陰謀に矮小化してはならない、実際に党員幹部が大衆を弾圧した事件など、そういう例をいろいろ拾い上げて、実証しようとしています<sup>3</sup>。それが分かると、単に権力闘争の一語で切り捨てることの過ちが明確になります。

私にとって最も参考になったのは、紅衛兵運動の派閥一覧というか、それらの特徴の分類整理学です<sup>4</sup>。思潮の分析は、「知青思潮---上山下乡运动期间知识青年对中国社会政治问题的探索」等で試みられています。

労働者出身の、切実な造反派がいれば、恵まれた太子党の子供たちも造反に参加する。紅衛兵を識別する大きなメルクマールとしての8月18日の天安門広場における毛沢東接見の意

<sup>1</sup> 矢吹晋『文化大革命』講談社現代新書、1989年。

<sup>2</sup> 印紅標「我的第一张“马列主义大字报”」『二十一世纪』香港1996年8月号。

<sup>3</sup> 印紅標「“文化大革命”中的社会性矛盾」『党史研究』1997年第2期。

<sup>4</sup> 印紅標「红卫兵运动的主要流派」『青年研究』1997年第4期。

味など内側からとらえています。派閥の動きが外からは分かりにくいのは日本も同じですね。日本でも 70 年代以降の政治党派、派閥の離合集散を全部的確に説明するのは、難しいでしょう。四分五裂して武闘になると、外からはほとんど理解できない。中国の紅衛兵運動も似ていた。そういう動きを自分の当時の体験を踏まえながら、丹念な聞き取りや資料の分析を通じて一つ一つ説明し、細密画を描き、これをつなぎあわせて全体図を描こうとしています。実証的に書かれた当事者の回想録やヒアリングを重ねて、資料を腑分けして分析する。私はいくつかの論文を読んだだけで、真面目な作風に感動しました。共産党体制のもとで知的誠実性を貫く研究者は珍しい。評判になるのは当然と思いました。同時にこのような研究は共産党統治の虚偽や恥部を結果的に暴くことになるので、研究費は出ないだけでなく、むしろ妨害される局面もあるでしょうね。とはいえ、このような良心的な研究者を大学の一角に保護しているだけでも、立派なことであり、われわれも見習うべきだと思います。私の『文化大革命』は新書判で、1989 年刊、20 刷 6 万部余りでました。機会があれば補足して書き直したいところですが、まあ無理でしょう（笑）。

**土屋** 印紅標さんの論文は、さっき司会をやった鈴木さんの訳したのがあります<sup>1</sup>。それからアントニオーニに関しても、印さんに参加してもらいました<sup>2</sup>。そこには印先生のお弟子さんの論文も出ています。あと日本語で読めるのは、国分良成氏の『文化大革命再論』に論文が出ています。私たちが訳したものは社会科学研究所のホームページから PDF で落とせます。

**前田** ありがとうございます。今紹介があった方が会場にいらっしゃるので、ご発言をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

**フロア** 僕は中国育ちの日本人で、印先生は僕の指導教官です。僕は北京大学の修士 2 年で、中国共産党史専攻です。中国では今でも文化大革命を研究することは非常に難しいことで、研究費がぜんぜんないんです。印先生は自費で研究しています。矢吹さんがレジュメに書いている『失踪者の足跡』は印先生の博士論文で、香港で出版された本です。僕から見て非常に素晴らしい本ですが、けっきょく大陸では発表できない。こういう素晴らしい研究者が北京大学にいるのに、北京大学の学生は印先生が文革を研究していることをまったく知らないんです。

---

<sup>1</sup> 印紅標「中国における文革研究と文革の記憶」鈴木健郎訳『専修大学社会科学研究所月報』第 559 号、2010 年 1 月 20 日、1～18 頁。

<sup>2</sup> 印紅標「歴史再訪—アントニオーニの『中国』を見る」鈴木健郎訳『専修大学社会科学研究所月報』第 591 号、2012 年 9 月 20 日、3～10 頁。

前田 ありがとうございます。

フロア 非常におもしろく聞かせていただきました。ちょっと思ったんですけど、中国の新幹線事故で車両を隠すという事件があって、中国人の友人に聞くと、これはよくやってきたことで、なにか都合の悪いことがあったら、とりあえず隠す、無くしてしまうというのが歴史的に当たり前の感覚だといいます。日本で大きな事故があって、運転手さんが過労で事故を起こしてたくさんの方が亡くなったというときに、被害者の方を追悼するのに運転者さんの魂もいっしょに追悼するかどうかについて、アメリカでキリスト教だと、犯罪者が犯罪を犯して多くの人が亡くなったときでも、その犯罪者の魂の救済もいっしょに祈るっていう話なのですが、中国ではどうかというと、中国では事故そのものが無かったことになるというんですね。文革中の写真などでも、失脚して都合が悪くなると、消してしまいますよね。無かったことにする、というのはまさに歴史的志向としてあるのかなと思うので、じゃさきほど土屋さんがおっしゃっていたように、その無くしていくプロセスを研究する、それを掘り起こせば歴史になるっていうのは、とてもおもしろい考え方で、非常に興味を持ちました。

前田 ありがとうございます。

矢吹 ちょっと一言、歴史を偽造したり証拠を隠滅したり、どこの国でもあることなんですね。しかし、誰かが、ちゃんとそれを記録にとどめることも確かなんです。たとえば司馬遷を考えてみて下さい。彼は権力者に不利なことを書いたから、宮刑にされたわけでしょう。それでも、筆を曲げなかった。『春秋左氏伝』には、「斉の宰相・崔杼、其の君を弑す」と書いた兄弟が相次いで殺され、3人目の弟も同じことを書いて、ついに崔杼は史官を殺すことをやめたという逸話があります。だから、文化大革命については、印教授がこの硬骨の史官に相当するわけです。圧倒的に多い御用学者たちの書いたウソは、歴史に残らない。研究費予算の担当者の顔をうかがって書いたものなぞ、歴史に残らないことは明らかです。

中国の場合、大陸では出版できないので、香港で出す話はしばしば聞きます。印さんの本は香港中文大学から出ています。むろん、若干、筆を曲げてやはり大陸での出版を狙うことを一概に批判はしません。読者が行間を読み取ってくれる程度ならば、それもよいと思う。いろんなケースがありますが、中国の歴史や文化は、けっこう奥が深いと実感しています。それと比べたら、日本政府やマスコミの「尖閣隠し」「尖閣病」なんか、チョロイ、チョロイ。とはいえ、尖閣をめぐるナショナリズム病は軽視できないので、私は『尖閣問題の核心』という本を

書きました<sup>1</sup>。

歴史の偽造とか抹殺とかで想起するのは、原発神話の一件です。『知事抹殺』を書いた福島県前知事・佐藤栄佐久君は、私の弟分みたいなもんです。高校で私が生徒会長のバトンを1年後輩の佐藤に渡したのです。彼が送辞を述べて、私が答辞を述べたのは1957年春でした。大学は私が経済学部で、佐藤は法学部でしたが、60年安保というのに学生時代、彼は一生懸命英語を勉強していた。彼は日米友好がやっぱり日本にとって肝要だと学生時代から考えていた。卒業後、自民党（宏池会）に入り、有望な若手と歓迎されて、宮沢喜一がアメリカに行くとき鞆持ちで連れて行ったり、中曽根がチェルノブイリに行くときにやはり鞆持ちで連れて行ったり、若手のホープでした。郷里に戻り、県知事5期20年は少し長いと感じていましたが、ついに検察にはめられた。原発現場から知事宛てに大量の投書(密告)が届く。なぜかという、現場でいろんな事故が起こっているにもかかわらず、保安院に宛てた投書がそのまま東電にまわり、現場の労働者がいじめられるケースが続いたからです。問題は解決されず、逆に東電から下請けいじめの指令がとどくだけ。こうして佐藤はくまなく現場を訪問し、投書内容を確認し、稼働停止を命じた。

普通ならば、ここで現場や知事の意見を聞いて、安全管理へと舵を切るべきなのに、政府・検察はマスコミを動員して冤罪で失脚させた。佐藤知事の権限を剥奪する陰謀が「道州制」なんですよ。「道州制」は、きれいごとと言ってますが、要するに、県知事から権限の剥奪を狙ったものです。道州制というオブラートに騙されているというのが佐藤の分析だと直接聞きました。当時、佐藤栄佐久の同志だった知事会の三羽カラスのうち二人の知事はもともと中央官僚出身なので本省に切り崩されてあっさり転向し、佐藤栄佐久だけが孤立し、有罪まで追い詰められた。実弟が工場跡地を時価相当で売却したのは、市場取引そのものであり、賄賂なしです。土地を換金したことで利益を得たとする高裁の判断を最高裁は認めたわけですが、これでは市場経済は成り立たない。日本はとんでもない官僚国家、検察独裁国家になっています。

尖閣交渉における「棚上げ隠し」もほとんど同じ構図じゃないですか。私は「尖閣カルト」にマインドコントロールされたと見ています。「無主地先占だから、歴史的に固有の領土であり、国際法的にも認められている」とワンパターンですけど、これは一億が尖閣病にかかったとしか思えない醜態です。みんな政府のウソを信じ切ってますね。私の友人スチーブン・ハーナーが『フォーブズ』のブログに私の『チャイメリカ』書評を書いたところ、米議会筋と見られる方から「ヤブキがほんとうのことを書いており、野田首相の説明はウソだ、首相は国民にウソをついていると、書き込みがありました<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 矢吹晋『尖閣問題の核心』花伝社、2012年。

<sup>2</sup> 原文をそのまま引用します——Japanese prime minister insists that “There is no doubt that the

前田 矢吹さんのお話が絶好調になってきたところで……

土屋 私は、去年、佐藤栄佐久さんの本『福島原発の真実』を読みたいへん感心しました。日本では福島の地方自治の首長が国とやりあっているわけです。地方がそれだけの力を持っているし、工夫をする頭もある。それに感心したんですが、これを中国語に翻訳して中国で出したら、中国の人たちにも参考になるんじゃないかと思ったんです。版元をお願いしたところまではよかったんですが、そのあと諸事情で実現しませんでした。この本には、国策で原発をやるっていうことに、地方自治体が抵抗した様子が具体的に書いてある。国がこんなやり方をしてくるのに対して、地方からはこのように抵抗するというノウハウがわかる。それと、民主主義を標榜している国の役人が、これだけえぐいことをするというのも。これは、中国の人々からすると、非常におもしろいし、参考になるのです。つまり、我々中国研究者は、竹内好以来、中国を鏡にして日本を考えようとしてきましたが、近頃みんながわかってきたのは、とくに 3.11 以降、じつは日本の政府は中国共産党と同じことをやっているというか、両者は鏡みたいになっていることです。つまり竹内好の「方法としての中国」は、いまや「方法としての日本」みたいになっていて、私たちは日本を鏡にして中国を考えることも可能じゃないかと思えるようになったのです。

前田 今重要な提起がされましたが、ここで会場から発言を求めます。どなたかおられたら手を挙げてください。

矢吹 さっき立ち話した書店の方はいらっしゃいますか。広場のことでコメントあれば。

フロア 亜東書店の小川です。私は 1988 年から 90 年まで天安門事件をはさんで 2 年、北京の外国語学院に留学していました。胡耀邦が亡くなったあと、学生運動のなかで留学生を集めて

---

Senkaku islands are Japan's inherent territory in terms of history and international law," Noda said. "There is no problem of sovereignty." He is lying to Japanese. China is not the only one who doesn't recognize Japan's sovereignty over these islands; Washington does not accept Japan's claims either. A US Congressional report published on Sept. 25 said Washington has never recognized Japan's sovereignty over the Diaoyu Islands (known in Japan as Senkaku). [ワシントンは断じて釣魚/尖閣諸島に対する日本の主権を認めたことはない] The report said the US recognizes only Japan's administrative power [米国は日本の行政権、施政権だけを認めた] over the disputed islands in the East China Sea after the Okinawa Reversion Treaty was signed in 1971. China had no diplomatic relations with US and Japan at the time and the transfer was done without China's consent. [沖縄返還協定の当時、中国は米国や日本と外交関係がなかったので、返還は中国の同意なしに行われた] Professor Yabuki is an honest man. [野田首相は国民にウソをついている。ヤブキは、このウソを批判した] ——Author : David Clark (IP: 76.126.173.181, c-76-126-173-181.hsd1.ca.comcast.net) URL : <http://profile.yahoo.com/RYPDGMWTR5R4LUT5JTMSRVLZQ> Whois : <http://whois.arin.net/rest/ip/76.126.173.181>

参加してくれ、ということで、広場でのハンストのときもずっと支援に行っており、89年6月3日の夜からずっと天安門広場におりました。そこで死者が出たかどうか、ということですが、矢吹先生が書かれたように、広場の中では死者はいないんじゃないかな。なぜなら英雄記念碑のまえに、学生のリーダーが学生を集めた。テントの中をまわって、残っていないかどうかを調べていました。私は実際見てますので、なかったと思います。

**矢吹** 先ほどBBCのシンプソン記者の悪口を言ったのですが、あのときシンプソンは天安門事件とベルリンの壁とルーマニアの権力崩壊とチャウシェスク処刑、この三つの現場を取材した記者として、ものすごい賞をもらっているんです。世界的な3大事件を、全部直接取材した記者という賞状です。ところが、私のレジюмеで長々と英文のまま紹介したように、天安門で取材した経歴は書いてありますが、そこで賞を得たことは、もうウィキペディアに書いてない。不名誉な事実が判明したから、訂正したのではないかな。そういう訂正を一切やってないのが日本のマスコミです。どれ一つとして、さっき朝日新聞の悪口言ったけども、読売新聞だって私の記事を載せただけです。あとはなんにもやってない。NHKは何年か前にスペインテレビのフィルムは3年後に紹介したけども、それだけです。世界的に見て、誤報の訂正を一番やってないのは日本です。ウィキリークスは2年前、2010年6月4日に、北京のアメリカ大使館から国務省に宛てた秘密電報を暴露した。これを用いて英『テレグラフ』紙は、「Tiananmen, no bloodshed inside Tiananmen」という記事を書いています。

日本はどういうことなのか。当時の時点での誤報はやむをえない。しかし、後日真相が分かったにもかかわらず、その訂正を一切怠っています。日本のマスコミは危ういと私は思っています。

**フロア** 私は横浜の中華学校（大陸系）で教員をしていました。65年母校である中華学校の幼稚部の教諭として勤務し、その後、小学部の教諭となりました。80年の初めに広東の暨南大学に留学しました。その頃、テレビで江青の裁判をやっていました。当時中国ではまだ家庭にはテレビが普及していなくて、大学で見ました。私が発言を求めたのはそのことを言うためではなく、ずいぶん前のことですが、東欧の記者が、文化大革命を映したというドキュメンタリーがNHKで流れたことがあります。当時偶然それを見て、なんでこれをもっと日本で広めないのだろうという思いがあり、もう一度それを見たいと思ったのですが、それっきりになって、まだそのドキュメントを見つけれられていません。東欧の方が撮った映像では、ほかにも天安門事件のとき、天安門広場では虐殺はなかったとはっきりと言っていたものもありました。これらの映像をもう一度見たいと思っておりますが、ご存じありませんか。

文化大革命の時に私の勤めていた学校も、あまり公表はしていませんが、随分影響をうけていました。当時『毛沢東語録』も勉強したし、文革の時、紅衛兵が腕章をつけて踊ったり歌ったりしたように、日本でも「はぐるま座」がそういうことをやっていましたが、学校でも経験していました。文化大革命についての総括を、中国も国としてきちんとしなければならないと思うのですが、私自身も当時教員だったので、華僑教育を考える今、文化大革命が学校や我々華僑に与えた影響をきちんと総括しなければいけないと思っています。今日はいろいろ勉強させていただきました。

**下澤** 当時、東欧は社会主義圏なので、可能性はあると思いますが、寡聞にして特定はできませんので、探してみたいと思います。

**矢吹** それはスペインテレビのフィルムじゃないですか。私のレジメのなかに名前が書いてありますけど、スペインテレビは広場撤退の一部始終を完璧に取材していたんですよ。ただしそれをどうやってマドリッドに送るかが大問題だった。なるべく細切れにして、後先がわからないようにして、送った。その結果、マドリッドでは繋ぎようがないがない。結局どうなったかというと、ジョン・シンプソン記者が北京飯店から「架空の実況中継」をやった BBC (音声) に合わせて、フィルムを放映した。せっかくちゃんとしたフィルムを撮っていながら、順番をもとに続けてやれば、全貌が見えたのに。さっきの土屋さんが言った『夜明けの国』の、あの教会が燃えた話と同じで、取材はまじめにやっても、受け取る側にそれが伝わってないから、むちゃくちゃになって、結局はムダに、有害な形で使われてしまう。逆用された。

**前田** 先ほど私が時代区分論で言いかけたことについては、また別の機会にしたいと思います。今日の問題提起のなかでは、矢吹さんが「66年のロマンだけを見て72年の現実を見ないというのはできないし、そういうふうに歴史は切れない」と指摘をされて、たしかにそうだと思います。映像とか写真でも、確かに66年67年ころの中国の人は、化粧づけがなくてりりしく、すがすがしく、私が中国へ行った90年代前半もまだ社会主義のなごりがありました。私ごとですが飯田橋によく仕事で行くのですが、90年代後半以降は、日中会館に来る中国の人の表情も身振りも急速に変わっていきました。私は生まれは大阪ですが神戸の華僑もさきほどの横浜と同じように論争も対立もあったと聞いてます。私は毎日のように、中学の帰りに神戸の中華書店へ行って『北京週報』を教材に文革の状況をききに行っていました。東大闘争で学生は正門に「造反有理」と書きましたが、機動隊にケガをさせられ指名手配されたとき、横浜の華僑の人たちにずいぶん助けてもらったと聞いております。私の先輩ですし仲間ですし、

お礼を言わなければ、と思っておりました。ありがとうございました。後半の議論の中で、隠蔽し消去するということと、記録するというお話がありました。現在の日本では、中国は消去することでは常習犯で、日本はそうじゃないというひとつの「常識」があるようですが、矢吹さんのご指摘は、むしろそうじゃないよ、一人でも記録する人がいる、というのが歴史だし希望なのだと思います。私も矢吹さんの指摘に賛成です。私が尊敬する中国研究の大先輩で増淵龍夫さんという方が『歴史家の同時代的考察について』<sup>1</sup>という立派な本を書いて、日本の中国研究は歪んでいる、中国礼賛も中国否定もけっきょく主体的立場として観点が立っていないんじゃないかと指摘された。それに対するひとつの答えが、先ほどの土屋さんの「日本を鏡にして中国を見る」ということではないでしょうか。歴史への現在的な意識、その増淵先生は『資治通鑑』という 11 世紀の歴史書、それまでの紀伝体に対して編年体で書いた歴史書なんですけども、これに百年くらい経ってから、胡三省が注釈を付け、それからまた数百年経ち、ちょうど日本の侵略下で、陳垣という、宗教研究で有名な方がまた注釈をつける。息が長いんです。文革についても、同様に、どこかで誰かが記録しているということは信じていいと思うんです。先年香港で見た本<sup>2</sup>を見ましたが、60 年代の中国の哲学界の論争を半世紀経って再総括している。と言うのは、官僚の総本山・党学校校長の楊献珍と毛沢東に論争があった。「二つを一つにする」のか「一を分けて二と為す」のかという論争です。楊献珍は当時、毛沢東にやつつけられたのですが、楊献珍の弟子が、あの論争では負けてないと蒸し返した本です。素晴らしいですね。日本の学者研究者は、文革期になにをしゃべってなにを記録し、どういうことを著述したのか、今どう思っているのか。総括を明らかにしているのか。なかったことにされている。「論争史」について、中国では 50 年かかろうと 100 年かかろうと、忘れてないぞっていう、歴史に対する執念みたいなものを私は感じます。土屋さんがおっしゃったように、日本を鏡にして中国を考える、そしてヨーロッパを考え、ヨーロッパ近代を考える、というのはとても大事なことじゃないか。

**土屋** 今の話で、陳垣という人は、私が専攻している道教のこともやっていて、『道家金石略』という本を出しています。それは、中国中の道教の石碑を探して碑文を記録しているんですが、印刷物ですからやはり誤植がある。もし陳垣さんが今も生きていて、この仕事をしたとしたら、たぶん写真を撮ったと思います。歴史記録も同じで、いま私たちは写真とか映像とか、そういう表象を問題にしなければいけない。そのように考えれば、いま前田さんが言われたことと全く同じ事を、私のレジュメにある胡傑監督とか、総称して言うと、インディペンデントで独自

<sup>1</sup> 増淵龍夫『歴史家の同時代的考察について』岩波書店、1983 年。

<sup>2</sup> 蕭島泉『共和國三次哲学大論戦』香港文匯出版社、2007 年。



に記録映画を撮っている人たちっていうのは、そういう人たちなんです。マクロな意味での歴史は書けないですが、ミクロなレベルで映像を使って残す。私たちは、その事について無関心じゃなくて関心を持つこと。できれば、日本でもっと見るようにする、見るができるようにする。海外でそれが見られている、ということが中国国内で怖いことでもあるし、励みにもなる。で、宣伝なんですけど、私はこの胡傑氏の映画を、今日は放映できませんでしたが、近いうちに専修大学で公開していきたい。公開するにあたっては、字幕を作らなきゃならないので、いま字幕を作っているんです。たとえば、彼の映画の一つ『私が死んでも（我雖死去）』に出てくる人は、完全に前田さんが言われたみたいで、66 年になにがあったか、記録を全部とっています。すごいですよ、この人は。自分の奥さんが紅衛兵に殺されてしまうのですが、殺されたっていう話を聞いて、彼は一番初めに何をしたかというと、カメラを買いに行った。そのカメラで亡くなった奥さんの様子を撮る。どうやって殺されたかというプロセスを撮る。彼女を批判した大字報などを撮る。全部写真を撮っている。そしてずっとそれを保存していて、胡傑監督に出会って、その記録映画を撮った。映画の出来としては議論があると思いますが、その記録の精神というのは、いま言われたようなものがあると思うんです。そこで一つ注目しなくちゃいけないのは、被写体になっている人が、そうやっていい、自分のことを全部撮ってくれ、というのがスゴイんです。そうした映画の中には、はじめは撮り始めたんだけど、途中でやっぱり怖くなって、止めちゃったという場合もある。監督さんももちろん怖いんだけど、被写体の方、撮られている人の方が途中で、自分が撮られて記録に残ると言うことが怖くなって、止めてしまう。これはミクロな問題なんですけど、日本の我々はこうしたことをもっと研究すべきじゃないかなと思うのです。

**前田** 会場の皆さんからは、何かありませんか。

**フロア** 本日は参考になる面白い講演をありがとうございました。私は世代的には「八十后<sup>ba shi hou</sup>」ということになると思いますが、知識青年文学という方向から文革を研究しようと思っています。文革 10 年説、時代区分論とからめて、今日の講演でうかがいたいんですけども、文革 10 年論というのは文革をそう総括してしまう、ある意味で国家が権力あるいは力をもって作り出した言説という面もあるのかもしれないですが、文革で民衆の側から幹部を批判したが失敗し、いまの国家資本主義の中国になっているということだと思いますけれども、文革を 10 年という形で総括して、そのあとそれを忘れてしまいたいというのは、民衆の側にも忘れてしまいたいとか、あるいは民衆ももう 10 年で文革切っちゃって改革開放で経済で伸びていく方がいい、っていうような思いもあるんじゃないかなという気もするのです。77 年に中国に行っ

た日本人が書いた本があるのですが、その人は完全に中国礼賛なので、華国鋒体制の中国に行ったときに、今年は文革 11 周年だと書いていたのですが、それと中国人が喋っていることのあいだにズレがあるのです。その日本人は気づいていないんですけど、中国人はもう文革は終わったと思っているのです。華国鋒がいちおう全部引き継いでいるから、77 年に行った日本人は、今年は文革 11 年目だとか書いていて、そこに文革礼賛派の日本人が見ている中国と、中国の民衆が感じている、毛沢東が死んだ、文革はもう終わりだという感覚との間にズレがあるように思います。そうすると、歴史を忘れてしまうとか、10 年ということにしてひどかったということにしてしまう、民衆の心理の側からの要請もあるんじゃないでしょうか。その辺のようにお考えでしょうか。

**前田** これについては、最後のまとめにときにお返事をいただきたいと思います。他にありますか。

**フロア** 文革が始まったころ、私たち華僑は毛沢東の著作、『実践論』『矛盾論』とかを真剣に学んでいました。当時、日本でも、大学紛争や学生運動の流れで、多くの人がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想などの理論学習をしていましたし、労働学校でもそういった著作を勉強していました。当初、文化大革命のことを知ったとき、私たちは、始めるべく起こった正しい運動だと思いました。なぜかというと、初めの宣伝文句とか呼びかけでは、毛沢東の延安での文芸講話のなかに、労働者には労働者の文芸がある、労働者のための文芸があるべきだといわれました。要するに社会主義の国になったら、人民の国になったのだから人民のための文芸、人民に奉仕する文芸が必要であると。労働者の国で『白鳥の湖』など王侯貴族を讃えるバレエなどはおかしいだろう、みたいな言われ方をしてきました。江青がのちに、これまであったバレエなどを新たに改作し『白毛女』『紅色娘子軍』や、現代京劇など労働者のための文芸に直すのですが、その賛否は別として、当時私は素直に、もっともだと思っていました。中国では早い時期から、毛著作の「人民に奉仕する（为人民服务）」の学習や、革命英雄の話聞き、「雷鋒に学べ」運動が盛んでした。思想教育という言葉はあまり好きではありませんが、新中国を支えるのは、これまでの価値観とは違う、人民のために奉仕する精神を尊び学び、自ら実践していく人々であると思いました。中国の小説(映画にもなりましたが)『青春の歌』などは、私に大きく影響を及ぼした物語ですが、ブルジョア階級出身の女主人公が地下黨員と接する中、自分の出生を恥じ、自ら思想改造をして人民の側に立つ人間になり、革命運動に身を投じるというストーリーで、感激したものです。戦後、新中国の建設に参加するため、多くの留学生、華僑青年が帰国しました。新中国成立までの長い道のり、成立後の多くの<sup>かんたん</sup>艱難辛苦、横浜の華

僑は自分たちの闘争と国の歩みを重ね合わせ、国のためにという真摯な思いがありました。だから文革の時期は、みんな一生懸命毛沢東の著作を勉強しました。当初日本では毛語録が手に入りませんでしたが、幸い妹が新華社の東京支社に勤めていたので、私は、妹が手書きしたものを借りて写しました。後に本物を手にしましたが。

文革が中国の発展を遅らせたといわれますが、文革の当初の意図はなんだったのか、当時の背景、国際情勢なども併せて考えていきたいと思っています。そして、なぜ変節し混乱してしまったのか、私自身の体験やこれまでの歴史を振り返り、今一度、文革を見直していきたいと思っています。文革の中で、パーマの髪の毛を切ったとか、ズボンの折り目を付けるのはブルジョア的だとか、あらぬ方向に進んでいった運動を、「なぜ？」と心を痛めていた当時の私への答えとして。

**前田** 残り時間が10分を切ってしまいましたので、3人の報告者に3分ずつ、言い残したこと、会場で出た質問に対する答えなどをお願いします。

**下澤** 軸になっているテーマに、歴史の抹消とか歪曲とかがあったと思うのですが、表象文化で写真や映画をやっている角度からいうと、確かに写真は撮ればそのまま記録になるんですが、それをそのまま信じることはできない、ということを最後に言いたいと思うんです。矢吹先生からお話がかったような、天安門広場の戦車の学生ですが、英語でも **Tank Man** という言葉で有名で、ユーチューブ (YouTube) で何百万もアクセスがあるわけです。でも彼がどうなったか最後まで映してない。そういったものが、ある意味またアマチュアのレベルで神話を作っている。私はフランスを専門でやっているのですが、写真はフランスで生まれたテクノロジーです。その写真の歴史を見ると、合成写真のようにフェイクを作るということは、十九世紀の段階からありまして、それはもちろんアナログ写真ですから、切ったり貼ったり粗雑なものではあるんですけども、もともと写真というのはそういうメディアなんだ、現在 21 世紀はデジタルで、いくらでもレタッチによる改変ができてしまう。ですから我々は、もしこういうものから教訓を汲み取るとすれば、さまざまな報道を見ていくときに、映像のリテラシーを同時に上げていく必要があるということを本当に実感いたしました。

**土屋** 私も全く同感です。さきほどは歴史学として写真を使うということを言いましたが、写真を使えばフェイクがあるわけで、写真は完全には真実ではない。史料・歴史叙述もそうですね。だから文献を読むときには文献批判をしますが、写真を見るときにも批判をするわけです。

矢吹 三つのことを話します。一つは、映像シンポだから映像のこと。私の友達で池谷薫監督が『延安の娘』とか、『蟻の兵隊』<sup>1</sup>を撮った人ですが、今度は震災で気仙沼で半農半林業の77歳の佐藤直志という頑固じいさんがいて、自分で樵だから木を切り出して、自分で仲間たちに手伝ってもらって家を建てちゃう。つまり行政がやる避難住宅、避難民対策はデタラメだから、その世話になんか絶対なりたくない、自分で家を建ててしまった老人の奮闘物語です。そのおじいさんと一年半つきあって、撮ったものです。タイトルの『先祖になる』(池谷薫監督)で検索してみてください。

二番目は、フロアからの話ですが、おっしゃるとおりだと思います。つまり、支配者や権力者だけでなく、庶民も早く文革を忘れたいのです。なぜかという、ある意味みんな被害者であると同時に加害者でもあったからです。だから早く忘れてしまいたい。これは、戦争が終わったとき日本人が「一億総懺悔」、みんなで懺悔しておしまい。責任追及なし。これに似てますよ。人はやはり生きていかなければいかんわけだから、早く文革頭、造反頭を切り換えて、商品経済に転換しないと生きていけない。被害の程度、加害の程度は、人によっていろいろあるはずですが、改革開放期に割を食っている人はやっぱり毛沢東時代がよかったと懐かしむ。だから歴史は細かく見る（虫の目）と同時に、全体として見なければ（鳥の目）、駄目だということでしょうね。

最後に、いま尖閣問題で日中がいろいろ言い合っていますが、中核の問題を一つ言いますとね、園田直と鄧小平の会談記録（1978年8月10日）を外務省は完璧に隠蔽している。1978年の八月八日「いい日旅立ち」で、園田は訪中した。鄧小平との間に何が話し合われたか。その数ヶ月前の4月に、一方で友好条約を結ぼうとしているのに、逆に漁船団が尖閣にわーと押し寄せた。日本側は、鄧小平はとんでもない男だ、一方で交渉をやりながら漁船を繰り出して圧力かけると大騒ぎになった。そこへ園田はあえて火中の栗を拾いに行って、成功した。熊本出身の園田は兵士として中国へ出陣、従軍期間が長くなったので帰還。最後は特攻隊員の候補者だった。もうちょっと戦争が長引いたら、園田は間違いなく死んでたはずですが、途中で終わったから、戦死せずに済んだ。

決死の覚悟で水風呂で身を清めて訪中した園田に対して鄧小平はちゃんと説明しているんですよ。漁船を送って邪魔をしていたのは華国鋒側だが、鄧小平の側は日本との協力を得て改革開放をやりようとしている。政敵がそれをつぶすためにやっている、この趣旨を間接話法で説明したのです。園田は背景は全然わからなかったけれども、鄧小平が真剣にメッセージを伝えようとしたことは以心伝心で通じたのです。実は、今でも中国研究者でさえ、真相がわかって

---

<sup>1</sup> 池谷薫監督『蟻の兵隊』は、山西省に戦後強制残留させられ、帰国したら勝手に残留したと、軍人恩給を拒否された事件を描いた。

ない。理由があるんですよ。『鄧小平年譜』には、一番肝腎な事が抜けてる。どの部分か。「ああいうことで騒いでいる連中は、台湾からアメリカに行ったやつで、アメリカの国籍持っているやつさえいる」「これからは絶対にああいう騒ぎは起こさせない。私を信じて欲しい」。こう言っているんですよ。鄧小平は当時、園田直に対してあからさまに、「あれは華国鋒派がやっているたどだ」とは言えなかった。華国鋒は党主席で鄧小平は副総理で、表向きは格が違う。だから鄧小平は、近く私が権力をとる。そしたら絶対に繰り返させない。やらせないから私を信用しろと園田に語りかけた。浪花節的ですが、男・園田直は感激して「じゃあ、やりましょう」と腹を決め、日中平和友好条約は調印の運びとなった。ところが会談記録のこの部分、尖閣協議の部分を外務省は「資料なし」と説明して情報公開におうじていない。私の友人の石井明教授(国際関係論)が、その資料を請求した。外務省に要求したところ、「開示できません」、理由は「その資料が存在しない」というものです。これは外務省が資料を隠滅したに違いないんですよ。“真昼の暗黒”というか、とんでもない情報隠しです。園田直『世界・日本・愛』<sup>1</sup>や張香山『中日関係管窺与見証』<sup>2</sup>に会談の核心部分は紹介されているのに、これに相当する外務省記録が存在しないといのは、世にも奇怪な話です<sup>3</sup>。

**前田** 討議もいよいよこれからというところで残念ながら時間となってしまいました。拙い司会でしたが、みなさんありがとうございました。きょうの討議から学んだことを私なりに咀嚼そしゃくしますと、歴史(正史)から抹殺され「存在しなかったこと」にされた人びとの立場から考え続けるということになりますでしょうか。反米戦争を貫こうとした小園安名(1902-1960)と厚木航空隊は、戦後マイホーム主義のなかで覆い隠されました。全共闘を貫こうとした永田洋子(1945-2011)と連合赤軍も、文革を貫こうとした遇羅克(1942-1970)と省無聯も、ともにその後の「脱政治」と拝金主義のなかで抹殺されようとしています。しかし、批判精神は彼らを鏡にして日本と中国を考えつづけるところからしか生まれないのではないかと——私はそう思いました。きょうはほんとうにありがとうございました。

<sup>1</sup> 園田直『世界・日本・愛』第三政経研究会、1981年。

<sup>2</sup> 張香山『中日関係管窺与見証』当代世界出版社、1898年、90～91頁。

<sup>3</sup> [追記]『朝日新聞』の悪口をもう一ついいます。2013年2月8日に園田天光光夫人のインタビュー「政界離れ、人形通して平和願う」と題したインタビューがあります。「主人は命がけでした。出発当日は水風呂につくきりました。我が家にはお湯と水、二つの風呂おけがならんでいました。何かがあると、水風呂に入って体を清めてぶつかっていった。水杯をして送り出しました。帰ってこれないかもしれない、という気持ちだったと思います」。これが未亡人の証言だ。一国の外相がこのような決意で成功させた交渉の記録が存在しないとは、どういうことか。『朝日』がこのインタビュー記事を掲げたこと自体はよいが、他方で、政治面では一貫して権力に迎合して「尖閣棚上げの記録はない」とする政府のウソを平然と書き散らし続け、恬として恥じない。私にはまるで理解できない精神構造である。